

都市女子大学生が地域振興に意識をもつ取り組みの可能性の 検討のための基礎的な研究

The Possibility of Urban Female University Students Becoming Aware of Regional Development
Basic research for the examination

石井 雅幸¹, 細谷 夏実², 堀口 美恵子³

Masayuki Ishii¹, Natsumi Hosoya², and Mieko Horiguchi³

¹大妻女子大学家政学部, ²大妻女子大学社会情報学部, ³大妻女子短期大学部家政系

¹Department of Child Studies, Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University

²Faculty of Social Information Studies, Otsuma Women's University

³Department of Domestic Science, Otsuma Women's University Junior College Division

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：地域振興，生活，文化，教育，福祉，食材

Key words : Regional Development, Lifestyle, Culture, Education, Welfare, Food

1. 研究目的

日本創成会議提言資料(2014)によると, 当時1799 あった日本全国の市区町村のおよそ半数にあたる876自治体が2040年までに消滅するという試算が示された. また, コロナ禍を受けて多くの企業で一時仕事のリモート化が進み, 様々な場での仕事ができる可能性を示唆する声があったが, コロナが5類になるとともにリモートワークの言葉もうすれつつある. それに加えて日本全国で多発する自然災害が, 都市への人々の移住を加速させている傾向もみられる. その結果として, 消滅地域増加への道が加速しているという見方もできる.

一方, 女性の自立が強く言われる時代を迎え, 家庭内においても女性の声が多くの場合で強くその家族の将来像を左右する時代を迎えている. このことは, 女性が自らの家庭の将来像を描く上で中心的な役割を担ってきているとも言える. こうした中で, 都市部で生活する女子大学生が, 将来を描き, その将来に地域を意識することを考える場を提供することは大きな意義と考える.

本学と連携協定を結ぶ石川県穴水町, 北海道美瑛町, 並びに本学の学祖の生誕地である広島県世羅町は人口規模がほぼ同じで, いずれの町も人口減少が進んでいる. これら3つの町が抱え

る課題は, 消滅地域になる可能性が否定できないところにある.

そこで, これからを生きる都市部で生活する女子大学生が本学に関係する3地域をモデル地域として, 我が国が抱える消滅地域の増加という課題解決のために, 何ができるかを模索し, 探究する学びの場をつくることができるのかを検討する. 本学の女子大学生が自らの将来を描くの中に, 地域振興を視野に入れた生き方を考えられる学びの場を大学の中につくることのできる可能性を検討したい.

そこで, 本研究では以下の点を目的に研究を進めていく.

研究の目的

石川県穴水町, 北海道美瑛町, 広島県世羅町の3つの地域をモデル地域として, 本学の学生が将来的に地域振興を考えていくことができる取組として何ができるのかを模索することを目的とする.

具体的には, 地域ごとに以下のことを行うことを通して, それらの実現可能性を検討する.

ア 北海道美瑛町: これまで児童学科児童教育専攻で取り組んできた取り組みの継続と社会情報学部環境情報学専攻の新たな取り組みの実施可能性並びに人間関係学部の福祉部門での取り

組みの方向の模索を行う。

イ 石川県穴水町：能登地震の被災に応じた復興支援に本学として何ができるのかを模索し、実施できる可能性がある支援を積極的に実施していく。

ウ 広島県世羅町：世羅町と本学との連携協定締結に向けての働きかけを行うとともに、世羅町に対して本学が行うことができることを模索していく。

いずれの地域においても見出せたことを実施することを通して、その継続の実施に向けた可能性、方向性を検討・吟味していく。さらに、その過程で、取り組みが本学の教育、研究活動につながるのか、3つの町の地域振興につながるのかを検証していく。また、見出された取り組みが、3地域を窓口にして本学学生の将来に対する地域振興への意識化につながるプログラム開発となり得るのかを検討する。

2. 研究実施内容

研究の目的で論じた点について、具体的に実施した研究内容に従って以下に報告を行う。

(1) 北海道美瑛町

北海道美瑛町とは、これまでも家政学部児童学科が中心となって以下のような取り組みを行ってきた。

① 美瑛探検隊（名称仮）：例年12月における東京と美瑛町の子どもたちの交流事業

ア 実施踏査（秋に行っている学生と教員による12月の事業に向けての下見事業）

(ア)参加 学生5名 指導教員4名

(イ)日程：8月27日（火）～30日（金）

イ 本番

(ア) 参加 子どもたち20名、学生5名、教員4名

(イ)日程：12月26日（木）～28日（土）

(ウ)大まかな予定

26日：皆空窯での体験 美宙見学 美瑛町の子供たちと合流 大雪交流の家宿泊

27日：望岳台での雪体験 交流事業 特別講演（JAXA 佐藤先生） お別れ事業 旭交流センター宿泊

28日：旭山動物園

なお、本取り組みは参加学生が企画立案、実施を行った。

② 美瑛町スクールサポート事業

美瑛町内にある6校の小学校と2校の中学校並びに町内唯一の高等学校に学生が入り、教育支援活動を行った。また、町主催の大きなイベントの手伝いを学生が行った。この手伝いは、美瑛町の婦人会などの団体と行うことから地域の中に溶け込んだ活動であると言える。また、この活動の中で学生たちは美瑛町の特徴的な教育活動の一つである特別支援教育の本質を学ぶ機会を得ることができている。

ア 秋事業

(ア) 9月3日（火）～9月10日（火）

※9月8日センチュリーライド

(イ) 参加 学生6名

イ 春事業（航空券 1人往復5万円）

(ア) 2月12日（水）～2月19日（水）

※2月16日宮様国際スキーマラソン

(イ) 参加 学生6名

③ 学園祭と3月のさくら祭りへの美瑛町・世羅町・穴水町としての参加

ア 10月学園祭の参加

(ア) 10月25日（金）の準備、3町と本学との交流事業の開催並びに、10月26日（土）～27日（日）に学園祭にて実施

(イ) 北海道美瑛町、石川県穴水町、広島県世羅町とのコラボでの特産物の販売の開催と隣接部屋での本学との関係の紹介展示を行う。学生が支援を行う。

イ 3月のさくら祭りへの参加

(ア) 3月15日（土）の開催。美瑛町と世羅町が参加

(イ) 美瑛町と世羅町の産物の直売会の開催。

④ 美瑛町ふれあい祭りへの参加

美瑛町の町民センターで毎年行っている「出会いふれあい祭り」にブース出展を行い、海育の事業を展開した。この祭りには道内並びに都内の大学が参加していた。今回をきっかけにし、今後も積極的な交流も考えていく。

⑤ その他の事業と打ち合わせ等

上記3つの事業に加えて、今年度から美瑛町特産の幻のアスパラであるラスノーブルの食物学科と短大家政による官能検査、新メニュー開発などを行っている。その一環として6月18日コタキッチンにてラスノーブル入りのピザとパンが販売された。

今後の活動の可能性を高めるため、7月に美瑛町を訪問して、各所担当者と以下の打ち合わせを行った。

・アスパラナスノーブル関係並びに今後の農産物を使った取り組みについて検討を行った。また、農福連携事業へのかかわり方の検討を行った。【担当：農林課】

・美瑛高校訪問

美瑛高校との打ち合わせを行いながら、指定校の数を増やしていく試みと地域振興の事業を推進した。その結果、美瑛高等学校から1名の受験生があった。【担当：まちづくり推進課・道立美瑛高等学校】

・大妻祭出展関係

大妻祭への出店方向性の確認を行うとともに、この取り組みへの学生の参加方法を検討する。【担当：まちづくり推進課・教育委員会】

上記以外に、年度末に、美瑛町からインターンを町に送ることができるかの打診が来ている。そこで、特に農福連携事業や町内の企業や農業へのかかわりを今後検討したい。その可能性を本学に新設予定の共生学部での取り組みの可能性を副学長に打診した。

(2) 石川県穴水町

石川県穴水町に関しては、2024年1月の地震に加えて、2024年夏の豪雨災害を受けて、復興がなかなか進まない状況が続いている。6月に1度現地を訪問し、取り組みの可能性を模索したが、残念ながら、本研究に関わる取り組みは、行えない状況が続いている。年度末に、オンラインなどを活用した穴水町の子どもを対象とした取り組みの打診があり、可能性を模索したが、町の方からの最終的な依頼がないままとなった。穴水町については、引き続き町と連絡を取りながら、取り組みの可能性を検討していく。

(3) 広島県世羅町

世羅町に関しては、本学と連携協定を結ぶことが大きな課題であった。昨年2月に世羅町を訪問した際に世羅町役場で町長をはじめとする役場の職員と協定を結ぶ可能性を模索した。それを受けて、本学学長並びに本学の同窓会組織であるコタカ記念会会長に相談を行い、世羅町と本学との協定の締結の可能性を協議し、その下地作りを本研究で行った。具体的には、世羅町

やこれまで本学と関わりを継続してきた世羅茶再生部会との下地打ち合わせ並びに締結までのおおよその日程や素案作りを行った。それ以後は、世羅町と本学の地域連携センターが連絡を取り合い、10月に連携協定を締結することができた。この締結を受けて、美瑛町の紹介で述べたように、本学学園祭にて美瑛町、世羅町、穴水町の合同の出店を行うことができた。

さらに、今後の取り組みの可能性を打ち合わせるために世羅町を2月に訪問して以下のような成果を得ることができた。

①世羅町も美瑛町同様に農業を主産業とする町である。また、そのいくつかは新たな産業として開発したものや過去において盛んに行われたものを復活させたりしていることがわかった。また、その中で、農福連携的な事業を推進したいことを考えている。

②世羅町の産物を活用した料理を開発して、本学の学食などに提供することを今後検討していく。これまでも堀口を中心としていくつかの取り組みが行われている。

③町内唯一の世羅高等学校との指定校などを結び（現在、短期大学部家政化のみ指定校としている。）、本学への進学を考える生徒への働きかけを行う共に、次年度の世羅高等学校の東京への修学旅行の機会を使った取り組みを行っていくこととなった。また、大妻コタカ先生の故郷である甲山地区にある甲山中学校にも訪問し、都内修学旅行の機会に、本学を世羅町の子どもたちに知ってもらう機会を継続することを確認した。

④世羅高等学校の空き教室を使った取り組みの模索

農業支援（農業生産への直接関与）、福祉部門（福祉作業所とのコラボ）、環境教育（ダルマガエルやギフチョウなどの絶滅危惧生物が生息する環境を保護する活動への支援）などを学生等が行う際の拠点として活用していく。

⑤2026年度の本学のキャリアデベロップメントプログラム（CDP）科目の課題提案の自治体として世羅町が行うことを打診し、町の役場としては受け入れていただいた。本取り組みを行う中で、少しずつ本学ができる取り組みを模索していきたい。

3. まとめと今後の課題

本研究では、共通の課題を抱えている穴水町、美瑛町、世羅町という本学とつながりのある地域について、地域振興を考えていくキーパーソ的な役割や各地域をつなぐハブとしての役割を都市部にある女子大学が担う可能性を探ってきた。こうした役割をもつことが地域にとってどのような価値を生み出すかを探るとともに、本学学生が地域振興に意識をもって学びを進める可能性と本学の研究活動の発展の可能性を検討する探索的な研究を行うことを目的として研究を進めてきた。まずは、地域ごとに目的に迫る成果を論じて、全体の結論を導き出す。

穴水町：能登地震の影響で訪問調査が実施できなかった。一方で、復興支援は、美瑛町が行うなど、本学が仲介役となる地域間のつながりを生み出すきっかけをつくることができた。現時点では、震災前まで行っていたような取り組みは進展できていない。

美瑛町：東京と美瑛町の子供の交流事業、美瑛町の小中学校への支援事業、CDP 授業科目への町の協力参加、学園祭・さくら祭りへの美瑛町の参加等を継続的に実施できる形ができてきた。さらに、今後、取り組みが本学の他の学部に広がっていく手がかりをつくりたい。

世羅町：穴水町や美瑛町と本学が取り組んできたことを参考にしながら、複数の取り組みを行う可能性が見え始めている。

全体的な結論：本研究を通して、本学が3地域との連携した取り組みの方向性が見いだせた。それとともに、今後これらの取り組みを行う中で地域振興を将来のキャリアの一つに考える基盤を、本学学生たちが持てる教育的な施策を模索して行く必要性も見え始めている。

本研究では、当初の目的として以下の3つを考えていた。その3つに基づく評価を行う。

- ① 本学が3地域の地域振興を考えていくキーパーソ的な役割と各地域をつなぐハブ的な役割を担える可能性の模索
- ② ①の役割を本学がもつことが3つの地域にとっていかなる意味を持つのかの模索
- ③ 本学学生が地域振興に意識をもって学びを進める可能性と本学の研究活動の発展の可能性の模索

これまで述べてきた成果から、①から③の目的を概括的にはとらえることができた。これらの取り組みをたたき台にして次年度以降につなぐ研究として、美瑛町での教育的な取り組みをさらに深く掘り下げていく。また、世羅町でのCDP 参画によって、世羅町の課題が見えるとともに本学の学生の世羅町への認識が深くなり、地域振興に関わる地域が増加することである。また、CDP をはじめとする全学共通科目の中で、地域振興を考える授業の位置づけを明確化する取り組みをキャリア教育センターと協議しながら進めていきたい。

4. この助成による発表論文等

論文や研究発表は実施していません。ただし、千代田区内をはじめとするエコ活動等のイベントを通して本学と3つの地域との連携を広報する活動は行ってきた。

付記

本研究は令和6年度大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(K2403)「都市女子大学生が地域振興に意識をもつ取り組みの可能性の検討のための基礎的な研究」を受けたものです。